

研究ノート

成人看護学実習前の課題意識を構成する要素

柴田和恵¹⁾・北林 司¹⁾・板垣喜代子¹⁾・矢嶋和江¹⁾A Constitution element of Subject Consciousness
before Clinical Practice of Adult NursingKazue SHIBATA¹⁾・Tsukasa KITABAYASHI¹⁾・Kiyoko ITAGAKI¹⁾・Kazue YAJIMA¹⁾

Key word : 成人看護学 (Adult Nursing)、臨地実習前 (before Clinical Practice)、課題意識 (Subject Consciousness)、看護学生 (Nursing Students)

I はじめに

看護基礎教育において臨地実習は時間的にも内容的にも非常に大きな比重を占め、看護現象を通して知識と技術、これらを活用した実践を統合する上で非常に重要な授業であり、学生の臨床能力の成長過程では不可欠な教育の機会である¹⁾。しかし臨地実習におけるその意義は認識されながらもいまだ、その効果的な教育方法が十分確立されていないのが現状である。

ところで、臨地実習での自己課題の明確化は、到達度の評価と共に学生の学習効果をあげるための要素²⁾ともいわれているが、本学成人看護学実習の指導を通して、学生の課題意識の不明確さや、事前学習レポートの活用意識の低さ等を感じ、それらの事が効果的な学習に繋がっていないように思われた。しかしながら、その実態は明らかではない。

先行研究をみても、実習前のレディネス調査の一環として自己の課題を自由記述させ、それらを知識・技術・態度領域に分けて内容を整理しているもの³⁾、実習前の学習意欲への影響要因を文献から明らかにしているもの⁴⁾、看護学生独自の学習意欲尺度を作成しているもの⁵⁾、実習経験録を活用して実習終了後に課題達成内容を明らかにしているもの⁶⁾、実習全体の学びをレポート記述から明らかにしているもの⁷⁾、学生の主体性を引き出す臨地実習指導の方法を模索するため課題実習における学生の体験と実習での自己課題の達成と学習内容に焦点をあてて検討してい

るもの⁸⁾等はあるが、学生の臨地実習前の課題意識を具体的に明らかにしたものは見当たらない。

そこで本研究では、今後の効果的な臨地実習指導への示唆を得るために、成人看護学実習に望む学生の実習前の課題意識とそれらに関連する要素を明らかにすることを目的とした。

II 用語の操作的定義

課題意識：「本人が自覚している実習前に準備しておきたいこと、実習で解決したいこと、達成したいこと」とする。

臨地実習前：「成人看護学実習開始3日前から前日」とする。

III 研究方法

1 対象者

A看護系短期大学の成人看護学実習は、前期実習5月から7月と後期実習9月から11月で、急性期あるいは慢性期の実習を各3週間実施することになっている。今回、前期に急性あるいは慢性期のいずれかの成人看護学実習を終了している3年生81名を対象に平成16年9月から11月の期間に調査を実施した。

2 対象素材

成人看護学実習前に研究対象者が自由記述した課題意識に関するレポート

1) 群馬パース大学

3 収集方法

成人看護学実習のオリエンテーション時に、どのような課題をもって実習に望もうと思っているかというテーマで各自レポート用紙(400字程度)1枚に自由記述してもらい、研究参加の同意の得られた者のみデータとして採用した。

4 倫理的配慮

本研究は、A看護系短期大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。具体的には、実習オリエンテーション時に、研究の趣旨を口頭と文書を用いて説明し、参加は自由意志で参加の有無が成績評価には影響しないことを保証した。又、データは本研究目的以外に使用せず、データの共有は、研究者間に限定すること、個人が特定できないようにコンピューター処理し、プライバシーの保護を約束した。尚、研究結果は学術雑誌等に公表することがある事も加えて説明し文書で同意を得た。

5 分析方法

得られたデータは、Klaus Krippendorffの手法⁹⁾を参考にして以下の手順で内容分析を行った。①対象者の記述している文章あるいは段落を文章上の意味を損なわないように、1意味単位で抽出した。②抽出した1つの文章に2つ以上の意味が含まれるものは、1文章1意味の分析単位に分けコード化を行った。③コード化した内容を類似性に従い比較しながらそれぞれ類型化しサブカテゴリー化した。④すべてのサブカテゴリーを内容別に比較し、類型化してカテゴリーとしてネーミングした。⑤カテゴリーを内容別に比較し類型化し並べ替え、関連性を考慮し、抽象度が高くなるよう修正を繰り返し、コアカテゴリーを抽出しネーミングした。⑥抽出されたコアカテゴリー間の関連性を整理した。

6 本研究の信頼性

本研究の信頼性は、学生の記述レポートのコード化およびデータ分析の全プロセスにおいて、共同研究者間の検討を繰り返し行うことにより確保した。

IV 結 果

1 対象者

研究に同意の得られた対象は、A看護系短期大学の3年生81名中67名(回収率82.8%)であった。

2 実習前課題意識を構成する要素

分析の結果、総コード数は、609コードであったが、

意味不明のものを除き598コードを研究対象とした。これらのコードは28のサブカテゴリー、11のカテゴリーに分類され、最終的に『実習課題』と『実習課題を導く要因』の2つのコアカテゴリーが見出された。

以下に『』コアカテゴリー、【】カテゴリー、〈〉サブカテゴリー、「」コードとして示し、以下に説明する。

1) 『実習課題』

表1-1に示すように、このコアカテゴリーは、【実習取り組み姿勢に関連する課題】・【対象理解に関連する課題】・【相互作用に関連する課題】・【看護過程に関連する課題】の4カテゴリーで構成されていた。

【実習取り組み姿勢に関連する課題】は、実習にどのように取り組んでいきたいと考えているかの記述であり、〈総合的取り組み姿勢〉・〈具体的取り組み姿勢〉の2つのサブカテゴリーから構成され、「充実した楽しい実習になるように努力したい」「患者様としっかり向き合いたい」「実習を通して看護観・人生観を深めたい」「積極的に看護技術を身につけたい」といったコードから生成されていた。

また、【対象理解に関連する課題】は、看護学実習では欠くことのできない対象についての記述であり、〈対象の把握〉・〈家族理解〉・〈経過別特徴理解〉の3サブカテゴリーで構成されていた。全コード数の約30%がこのカテゴリーに集中しており、「病態理解を深めたい」「全人的にその人を捉えたい」「家族関係の影響を考慮していきたい」「対象の家族と関わりたい」「慢性疾患とセルフケアについて学習したい」「急性期と慢性期の違いを学びたい」といったコードから生成されていた。

【相互作用に関連する課題】は、実習では人間を対象にしていることに加え、様々な人との関わりの中で、学習を深めていくため、それらに関連した記述であり、〈関係性構築〉・〈小集団活動〉の2つのサブカテゴリーで構成されていた。これらは、「患者との信頼関係を築きたい」「病棟看護師とコミュニケーションを深めたい」「カンファレンスを不足部分を見つけあう学びの場としたい」「カンファレンス充実のための自己学習を深めたい」といったコードから生成されていた。

【看護過程に関連する課題】は、〈アセスメント〉・〈問題抽出〉・〈計画立案〉・〈看護実践〉の4つのサブカテゴリーで構成され、【対象理解に関連する課題】についてコード数が集中していた。具体的には、「対象の状況を正確にアセスメントしたい」「得られた情報を整

表 1-1 実習前課題意識の構成要素

| コアカテゴリー | カテゴリー | サブカテゴリー | 主なコード |
|------------------|------------------------|----------------|---|
| 実 習 課 題 | 1) 実習取り組み姿勢に関連する課題(96) | ①総合的取り組み姿勢(47) | 充実した楽しい実習になるように努力したい 患者様としっかり向き合いたい ヒヤリハットのない実習にしたい 素直に実習に取り組みたい よく寝て健康な状態を維持し実習したい 等 |
| | | ②具体的取り組み姿勢(49) | 実習を通して看護観・人生観を深めたい 誰が見てもわかる記録を書きたい 積極的に看護技術を身につけたい 不明な点を調べたり、質問して明確にしていきたい 日々の行動目標をその日に達成したい 国家試験につながる学習をしたい 等 |
| | 2) 対象理解に関連する課題(176) | ①対象把握(87) | 病態理解を深めたい 全人的にその人を捉えたい 目的意識のある観察、情報収集をしたい 等 |
| | | ②家族理解(9) | 対象の家族と関わりたい 家族関係の影響を考慮していきたい 等 |
| | | ③経過別特徴理解(80) | 手術室看護師の役割理解を深めたい 急性期の展開の早さについていきたい 整形外科でリハビリ期の特徴を理解したい 慢性疾患とセルフケアについて学習したい 急性・慢性期の違いを学びたい 等 |
| | 3) 相互作用に関連する課題(46) | ①関係性構築(34) | 患者と信頼関係を築きたい 目的意識のある関わりをしたい 病棟看護師とコミュニケーションを深めたい 等 |
| | | ②小集団学習(12) | カンファレンスを不足部分を見つけあう学びの場としたい カンファレンス充実のための自己学習を深めたい 等 |
| | 4) 看護過程に関連する課題(99) | ①アセスメント(11) | 対象の状況を正確にアセスメントしたい 得られた情報を整理し、その意味を把握したい 等 |
| | | ②問題抽出(5) | 問題を予測して抽出できるようになりたい 根拠のある問題抽出をしたい 等 |
| | | ③計画立案(10) | 個別性のある計画を立案したい 今後の生活環境を想定した計画を立案したい 等 |
| | | ④看護実践(73) | 喜んでもらえる看護を提供したい 個別性のある看護実践をしたい 患者の思いや考えを尊重した実践をしたい 安全・安楽を第一にケア提供したい 精神的支えになりたい 等 |

() はコード数

理し、その意味を把握したい」「問題を予測して抽出できるようにになりたい」「根拠のある問題抽出をしたい」「個別性のある計画を立案したい」「今後の生活環境を想定した計画を立案したい」「患者の思いや考えを尊重した実践をしたい」「安全・安楽を第一にケア提供したい」といったコードから生成されていた。

2) 『実習課題を導く要因』

表 1-2 に示すように、『実習課題を導く要因』のコアカテゴリーは、【実習に関連する否定的感情】・【実習に関連する要望】・【今回の実習領域に関連する受け止め方】【実習取り組み姿勢に関連する評価】【対象理解に関連する評価】【相互作用に関連する評価】【看護過程に関連する評価】の 7 つのカテゴリーで構成されていた。

【実習に関連する否定的感情】は、実習にまつわる不安定な心理状態等が記述されており、〈実習に関連する実感・本音〉・〈実習に関連する不安〉の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。具体的には、「頑張りたい気持ちとそうでない気持ちがあった」「実習を終えても

達成感がない」「記録はあまり得意でないし、マイペースで行動も遅いので不安である」「どのような実習場所で看護師とうまく関わられるか心配だ」といったコードで生成されていた。

また、【実習に関連する要望】は、過去の実習体験等から効果的実習の展開を想定した学生なりの改善点等に関する記述であり、〈事前学習〉・〈実習指導〉の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。具体的には、「課題の量を絞ってほしい」「課題提出期限が実習とかけ離れている」「受け持ち患者情報は事前にほしい」「教員による記録指導内容を統一してほしい」といったコードで生成されていた。

【今回の実習領域に関連する受け止め】は、これから始まる成人看護学実習に関する捉え方についての記述であり、〈実習に関するイメージ〉・〈経過別の特徴〉の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。具体的には、「急性期は展開が早く大変だ」「成人は範囲が広くイメージが湧かない」「慢性疾患は治療が長期に及ぶ病気だ」「急性期は身体的変化が著しい」といったコード

表1-2 実習前課題意識の構成要素

| コアカテゴリ | カテゴリー | サブカテゴリー | 主なコード |
|----------------------|---------------------------|---|---|
| 実習課題を導く要因 | 5) 実習に関連する否定的感情 (36) | ①実習に関連する実感・本音 (26) | 頑張りたい気持ちとそうでない気持ちがあった 実習が楽しくなくて苦痛に思った その日その日を過ごすのが精一杯だった 学習内容が身につけていない感じがする 実習を終えても達成感がない 等 |
| | | ②実習に関連する不安 (10) | 自己の傾向に関する不安 スタッフ・患者との相互作用に関する不安 わからないことがあって不安だ 等 |
| | 6) 実習に関連する要望 (24) | ①事前学習 (8) | 課題の量を絞ってほしい 課題提出時期が実習とかけ離れている 等 |
| | | ②実習指導 (16) | 演習では疾患部位を想定してやってほしい 受け持ち患者情報は事前にほしい 教員による記録指導内容の統一をしてほしい 受け持ち患者で手術見学、術後看護を経験したい もっと学習のポイントをアドバイスしてほしい 等 |
| | 7) 今回の実習領域に関連する受け止め方 (21) | ①実習に関するイメージ (5) | 急性期は展開が早く大変だ 整形外科は骨を扱うので感染しやすい 成人は範囲が広くイメージが湧かない 等 |
| | | ②経過別の特徴 (16) | 慢性疾患は、治療が長期におよぶ病気だ 術前は全身状態を充分把握する必要がある 急性期は身体的変化が著しいと思う 等 |
| | 8) 実習取り組み姿勢に関連する評価 (31) | ①事前学習への取り組み (13) | 事前学習は実習に必要だと思う 文献を複写するだけでなく理解に努めた 事前学習はやつつけ仕事になっていた 等 |
| | | ②消極的実習取り組み姿勢 (15) | 避けてはとおれないので仕方なく取り組んだ 自分から勉強するというよりさせられていた感じだ 等 |
| | | ③積極的実習取り組み姿勢 (3) | 目的・根拠のあるケア・行動を心がけた カンファレンスを有効にするため自己学習した コミュニケーションを重視して取り組んだ 等 |
| | 9) 対象理解に関連する評価 (34) | ①病態理解 (25) | 徐々に疾患の知識を身につけ力がついた 意図的観察ができなかった 病態理解が不足していた 等 |
| | | ②経過別特徴の理解 (9) | 急性期では術前・中・後の経過が理解できた 慢性期では精神的ケアの側面が深められた 等 |
| 10) 相互作用に関連する評価 (10) | ①関係構築 (7) | 患者とスムーズなコミュニケーションがとれなかった 関係性の深まりによって学習意欲が向上した 家族と関わることができなかった 等 | |
| | ②小集団活動 (3) | 受け持ち以外の疾患を学べる機会になった カンファレンスに積極的に参加できなかった 等 | |
| 11) 看護過程に関連する評価 (25) | ①アセスメント (3) | 情報の結びつけが不十分だった 基礎知識の不足のためアセスメントができなかった 等 | |
| | ②問題抽出 (3) | 予測性をもって問題が出せなかった 関連図が上手くかけなかった 等 | |
| | ③計画立案 (12) | 具体的なプランが立てられなかった 個別性を取り入れられなかった 計画立案のみで実施評価が不十分だった 等 | |
| | ④看護実践 (7) | 看護技術が未熟だった 予測したケア実践ができなかった 実習毎に技術の向上を感じる 等 | |

() はコード数

で生成されていた。

【実習取り組み姿勢に関連する評価】は、実習にまつわる取り組み姿勢についての振り返り評価等の記述であり、〈事前学習への取り組み〉・〈消極的実習取り組み姿勢〉・〈積極的実習取り組み姿勢〉の3サブカテゴリーで構成されており、「文献を複写するだけでなく理解に努めた」「事前学習はやつつけ仕事になっていた」「避けて通れないので仕方なく取り組んだ」「勉強するというよりさせられていた感じだ」「目的・根拠のあるケア・行動を心がけた」「コミュニケーションを重視して取り組んだ」といったコードで生成されていた。

【対象理解に関連する評価】は、対象理解に関する

不足や反省、成果等についての記述であり、〈病態理解〉・〈経過別理解〉の2つのサブカテゴリーで構成され、「徐々に疾患の知識を身につけ力がついた」「病態理解が不足していた」「急性期では術前・中・後の経過が理解できた」「慢性期では精神的ケアの側面が深められた」といったコードで生成されていた。

【相互作用に関連する評価】は、実習での様々な人との相互作用についての記述であり、〈関係構築〉・〈小集団活動〉の2つのサブカテゴリーで構成され、「患者とスムーズなコミュニケーションが取れなかった」「関係性の深まりによって学習意欲が向上した」「受け持ち以外の疾患を学べる機会になった」「カンファレンスに

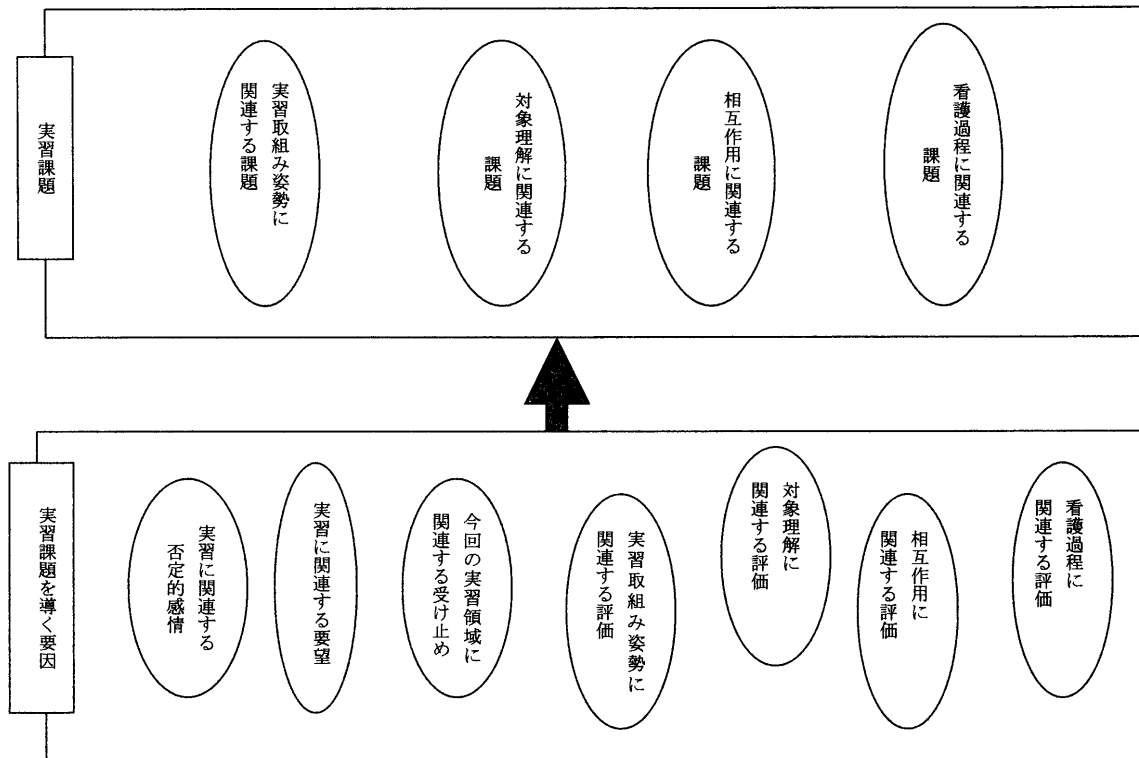


図1 実習前課題意識を構成する要素の構造

積極的に参加できなかった」といったコードで生成されていた。

【看護過程に関連する評価】は、看護過程の4段階についての記述であり、〈アセスメント〉・〈問題抽出〉・〈計画立案〉・〈看護実践〉の4サブカテゴリーで構成され、「情報の結び付けが不十分だった」「基礎知識の不足のためアセスメントができなかった」「関連図が上手く書けなかった」「予測性をもって問題が出せなかった」「具体的なプランが立てられなかった」「個性を取り入れられなかった」「看護技術が未熟だった」「実習毎に技術の向上を感じる」といったコードで生成されていた。

3 実習前課題意識を構成する要素の構造

前述のように、課題意識を構成する要素として、『実習課題を導く要因』と『実習課題』の2つのコアカテゴリーが抽出された。これら2つのコアカテゴリー間の関係は、図1に示すように『実習課題を導く要因』から『実習課題』に向かっての一方向の関係であった。

V 考 察

1 実習前課題意識を構成する要素について

今回、実習前課題意識を構成する要素として、『実習

課題』と『実習課題を導く要因』の2つのコアカテゴリーが抽出された。

まず、コアカテゴリーの1つである『実習課題』は、【実習取り組み姿勢に関連する課題】と【対象理解に関連する課題】、【相互作用に関連する課題】と【看護過程に関連する課題】の4カテゴリーから構成された。これらは、A看護系短期大学の成人看護学実習の評価項目である〔対象理解〕を含む〔看護過程〕と〔相互作用〕や〔自己の傾向〕を含む〔態度〕領域に関する項目を反映している表現になっていた。また、これらは、相場ら¹⁰⁾が実習終了後に課題達成内容として学生が記述したもののから抽出した、3つの自己課題〈評価項目に沿った表現：対象理解、看護計画・実施、評価・記録報告など〉〈既習学習に関連した表現：解剖生理、治療処置別看護など〉〈自己の傾向に関連した表現：自己表現力、実習への取組みなど〉とも類似しており、学生が実習目標を意識して課題を挙げていることが伺えた。

さらに、今回全コードの30%が【対象理解に関連する課題】に集中していた。これは、成人期の対象の特徴として疾患や経過がバラエティに富んでおり、学習すべき知識や技術が複雑多岐にわたっていることが影響していたと思われる。

2 実習前課題意識を構成する要素の構造について

今回抽出された『実習課題』と『実習課題を導く要因』の2つのコアカテゴリーは、『実習課題を導く要因』から『実習課題』の一方に方向に影響を与え、課題を抽出する関係になっていた。

『実習課題を導く要因』の下位カテゴリーをみると、まず【実習に関連する否定的感情】は、未知なものやネガティブな体験からくる不安や緊張に関する記述がほとんどであった。また、【今回の実習領域に関連する受け止め方】は、サブカテゴリーに〈実習に関するイメージ〉や〈経過別の特徴〉があげられており、成人期の特徴をどの程度受け止めているかが記述されていた。岡堂¹¹⁾は、動機は行動を目標に方向づけるが、感情もまた目標志向的な動機として働き、動機づけと感情は密接に結びついていると述べているが、【実習に関連する否定的感情】と【今回の実習領域に関連する受け止め方】のカテゴリーが、もう一つのコアカテゴリーである『実習課題』と密接に関連していることを裏付けているともいえる。また、このようなネガティブな感情は課題を明確化するのに有効ではないとも思われる。そのため、このような学生心理を認知し、佐藤ら¹²⁾が報告しているように具体的な指導方法を意識することも重要と考える。

また、藤本¹³⁾は、既習の事柄では理解や説明のできない事柄が現存した時、既習とのズレが認められ、また、自分とは異なる他者による理解が現存した時、他者とのズレが認められる。このとき、学習上の課題や問題が存在し、この矛盾やズレを意識する事が課題意識の具体的様相であると述べている。『実習課題を導く要因』の【実習取組み姿勢に関連する評価】【対象理解に関連する評価】【相互作用に関連する評価】【看護過程に関連する評価】の4カテゴリーの記述は、このような矛盾やズレを意識して課題を明確化しているとも解釈できる。

さらに、柳瀬¹⁴⁾は、学生が課題を意識するのに必要な思考として、定まった手順を誤りなく能率的に遂行することを目標にした思考 (how 思考) ではなく、課題意識の根本である矛盾やズレを受け止め、考える思考 (why 思考) をとらせることが必要であると述べている。このように臨地実習で課題が意識される場面、すなわち、学生自身が既習とのズレや臨床指導者や教員などの他者の理解とのズレを意識し、新しい課題に出会う場面で、学生自身がそれに気づけるように、教員は意図的に指導もしくは支援する事も大切と考え

る。

その他、臨地実習終了後に振り返りの機会をもつことで、自己の活動を修正しようという新たなる課題意識あるいは、さらに発展的な課題意識が生まれる可能性があるため、各実習終了後の振り返りを明確に義務付け、次の実習につなげていけるように位置づけていくことも急務と考える。

なお、今回調査時期が実習の後半であったことで、対象に視点を当て、その反応や行動変容から自己の行動を評価し表現する事ができており、具体的な課題内容となっていたとも思われる。

VI 結 論

- 1 学生の成人看護学実習前の課題意識を構成する要素として、『実習課題』と『実習課題を導く要因』の2つのコアカテゴリーが抽出され、『実習課題』は、【実習取組み姿勢に関連する課題】・【対象理解に関連する課題】・【相互作用に関連する課題】・【看護過程に関連する課題】の4カテゴリーで構成されていた。また、『実習課題を導く要因』は、【実習に関連する否定的感情】・【実習に関連する要望】・【今回の実習領域に関連する受け止め方】・【実習取組み姿勢に関連する評価】・【対象理解に関連する評価】・【相互作用に関連する評価】・【看護過程に関連する評価】の7カテゴリーで構成されていた。
- 2 成人看護学実習前の課題意識の構成要素間の関連をみると、コアカテゴリーである『実習課題を導く要因』が『実習課題』を導き出していると考えられた。

VII 研究の限界と今後の課題

本研究は、A看護系短期大学の学生を対象にした調査であり、今回の結果を一般化するには限界がある。しかし、今回具体的な実習課題の明確化の他に、実習課題を導き出す要因と思われるカテゴリーを明らかにすることができたことは、学生自身に課題を意識させるような実習指導のあり方に示唆を与えるものと考えられる。今後は、実習領域の違いや学生の性格傾向等との関連などを明らかにすることを課題とし、実習指導に役立てていきたい。

引用文献

- 1) 上杉純美・岡田範子・西嶋志津江・中西純子：課題実習における学習効果。愛媛県立医療技術短期大学紀要 2002, 15：51-56.
- 2) 相場百合・山梨伊津子：臨地実習における学生の自己課題の変化。神奈川県立看護教育大学校紀要 2001, 24：61-65
- 3) 和田清子・松井謙次・宮崎昌子・落合清子：成人臨床看護Ⅲの科目構築と実習の関連性—授業展開の実際と実習へのレディネスその1—。聖隷学園浜松衛生短期大学紀要 1992, 15：31-47.
- 4) 加地幸子：臨地実習開始前の学習意欲に影響を及ぼす要因。神奈川県立看護教育大学校集録 2001, 26：142-149.
- 5) 永嶋由理子：看護学生の学習意欲の検討。山口県立大学看護学部紀要 2001, 5：39-45.
- 6) 前掲2)
- 7) 乗子嘉美：学生の課題レポートを用いた成人周手術期実習の教授活動に関する検討。順天堂医療短期大学紀要 2003, 14：180-186.
- 8) 斉藤ゆみ・金子昌子・小平京子・森山郁子・土屋紀子：看護教育における実習への「課題学習」の導入—4年間の試行とその評価—。自治医大看護短大紀要 1997, 5：37-47.
- 9) Klaus Krippendorff・三上俊治・椎野信雄・橋本良明訳：メッセージ分析の技法, 勁草書房, 東京, 1989.
- 10) 前掲2)
- 11) 岡堂哲雄編 医療・看護・福祉—心理学講座Ⅰ心理学入門, 共同出版, 1987, p54.
- 12) 佐藤ヨリコ他：看護学生の臨床実習における不安、自尊感情と学習成果からみた指導方法の検討。慶応義塾看護短期大学紀要 1997, 7：9-17.
- 13) 藤本義明：『生きる力をはぐくむ算数授業の創造』第3巻 第2節「課題意識と課題づくり」, 日本文教社, 1999.
- 14) 柳瀬 修：「なぜ『課題意識』を育てる授業か」。算数教育 1991, 423：8.